



昭和34年のたて町通り。右手松の木の奥に旧酒井家が見える

輪島市指定文化財旧酒井家住宅(旧門前町指定文化財)

たて町通りに面して建つ旧家の町家である旧酒井家住宅は、土蔵(どそう)：明治37年、主屋：明治28年に建てられました。主屋二階正面の両側に袖壁(袖卯建そでうだつ)が設けられており、軒裏のベンガラ塗りの腕木(うでぎ)、出桁(でけた)、鏡板(かがみいた)、正面下屋の南側破風(はふ)の繰り型(くりがた)など町家の典型的な意匠が残っています。

間取りを見ると、主家二階は12.5畳と10畳の続き間座敷の他、風雅な張出し縁のある4.5畳など、それぞれの部屋に床の間が付き、接客を意識したと思われる変化に富む間取りとなっています。また、玄関から通り庭をはさんで右側に店ノ間(みせのま)、左側に土蔵があり、主屋、土蔵共に当初の姿がよく残るたて町通りの大変貴重な商家の町家です。



鏡板
腕木
出桁



工事概要

工事名：総持寺周辺地区街なみ環境整備工事
(生活環境施設 建築工事1工区・2工区
電気設備工事)
発注者：輪島市 都市整備課
設計者：(株)ヒューマンネット、むとう設計(有)
施工者：1工区 ― 宮下建設(株)
2工区 ― 栗建設(株)
電気設備 ― 稲垣電機(株)

工事期間：平成18年1月～8月
工事費：6,700万円
一階床面積：191.79㎡
二階床面積：165.78㎡
延べ床面積：357.57㎡



改修前



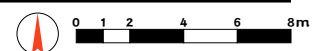
- ① 薪戸(しとみど)と呼ばれる建具の痕跡あり
- ② 畳寄せ(たたみよせ)と框(かまち)の痕跡あり
- ③ 雨戸の鴨居(かまの)の痕跡あり

- ④ 二間の開口の痕跡あり
- ⑤ 中庭を望む開口の痕跡あり
- ⑥ 二間半(約4.5m)の開口の痕跡あり
- ⑦ 構造強度を上げるため壁量を増やした

- ⑧ 木羽板(3～5mmの薄い板)を何層にも重ねた木羽板葺きの屋根の痕跡あり
- ⑨ 茶室を活用するため水屋を設けた



改修後



～改修後の当時の姿～

幾度もの改装を重ね、当初の姿が隠れてしまっていた旧酒井家住宅ですが、正面看板の撤去から始まり、痕跡調査などのさまざまな作業を経て、当初の町並を思わせる姿を再現することができました。

改修前

改修後



外観

蔭戸(しとみど)や木羽葺き(こばぶき)の下屋、袖卯辰(そでうだつ)、腕木(うでぎ)、漆喰壁(しっくいかべ)など、伝統的町家の意匠が見られます。

蔵(一階)

痛みの激しかった一階の床下地材を除いて梁(はり)や柱、栗の床板など、使える部材はそのまま使用しました。蔵内部の白漆喰壁(しっくいかべ)を補修し美しい白がよみがえりました。

蔵前(一階)

伝統的な建具である蔭戸(しとみど)を開け放すと、真っ白で重厚な蔵の扉は、たて町通りにまでその存在感を伝えることができます。

通り庭(一階)

茶ノ間の建具の意匠や敷き石など、当時の通り庭を構成する要素をそのまま復元・再使用しました。

階段室(二階)

破れた障子や襖の張替えや、ジュラク壁の塗替え、弁柄(べんがら)・拭き漆の塗り直しなどを行いました。

座敷(二階)

畳は昔ながらの藁(わら)床で柔らかい感触が足に伝わります。
以前は看板で遮られていた、たて町通りへの視界も繋がり、通りの様子が感じられる部屋となりました。

奥ノ間(二階)

床の間の色あせた砂壁(黒)も塗り直され、脇床の天袋建具の金色と共に、当時来客をもてなしていた部屋としてふさわしい趣がよみがえりました。

～当時の姿を復元させる手がかり～

改修前の旧酒井家住宅の当初の姿は、幾度もの改装によって分かりにくくなっていましたが、後付けされたものを取外すと、当時の姿を再生する手がかりとなるさまざまな痕跡がみつかりました。

蔵前：蔀戸（しとみど）

蔵前の後付けされたアルミサッシなどをとりはずしたところ、両サイドの柱面に蔀戸と呼ばれる古い建具溝の痕跡が見つかりました。

また、梁下面には柱のほぞ穴（部材をはめ込むための穴）と圧痕が見つかりました。



蔵前：持送り（もちおくり）

蔵前柱の通り沿いに面する部分に持送りと呼ばれる部材のほぞ穴が見つかりました。

持送りとは、ひさしなど突出する部分を支えるために、壁や柱などに取付ける面材のことを言います。



店ノ間前：柱、欄間（らんま）、海老虹梁（えびこうりょう）木羽葺き屋根（こばぶきやね）

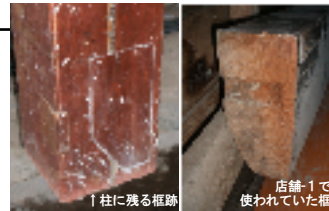
店舗下屋の天井材をはがしたところ、禅宗様の特徴である海老虹梁と呼ばれる湾曲した部材や、軒先部分の桁下には柱の圧痕と欄間じゃくりも見つかりました。

また、下屋部分の金属屋根をめくると、木羽葺きの屋根が隠れていました。



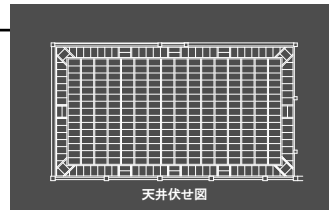
店ノ間：畳部分

後付けされた壁材をはがすと、畳を敷く部屋に使用される畳寄せと框（かまち：土間から畳への上がり口にある横木）の痕跡も見つかりました。その痕跡は、改修前の店舗ー1小上がり部分の框として使用されていた部材と同じ断面の形をしており、店舗を改装する際に一部を再使用したと考えられます。



店ノ間：天井

後付けされた天井をはがすと、当初の天井の痕跡が現れました。部屋四隅の梁材には、竿縁天井の竿の跡と一部天井板材が残っていました。それらの痕跡をもとに、考えられる天井を検討し再現しました。



店ノ間：雨戸

ショーケースやアルミサッシなどを取外したところ、たて町通りに面した梁下に雨戸の溝が見つかりました。



構造補強

柱の根元や、土台などの重要な構造材の痛んでいる部分は取り除き、新しい材料を継ぎ足したり、取替えたりしました。

また、建物全体の歪みを矯正するため、ワイヤーで引っ張り、さらに建物の耐震性を高めるため新しい壁を設けました。



～地域に根付いた材料と工法で～

總持寺周辺地区の建物は、気候風土にあった材料と職人の伝統技術を使って建てられています。外観を美しくするだけでなく、地域に根ざした材料・職人技術を用いて建物をつくるのが、總持寺周辺地区の町並みを継承していく上で重要ではないでしょうか。

土壁 小舞（こまい）下地

細く割った竹を立て横に格子状に細かく組んだ小舞下地の上に、藁すさを練りこんだ粘土を下塗りとして使っています。

三和土（たたき）

土に石灰やにがりを混ぜて練ったものを、たたき固めて仕上げた土間のことです。



↑小舞下地



↑三和土のたたき固め

蔵壁 亀裂補修

蔵の入口には大きな亀裂がありました。小舞に痛んでいる部分を補強し、土が乗りやすいよう小舞に縄を結びました。そうした下地に粘土を塗っては乾燥させ、またその上に粘土を塗っては乾燥させ…という作業を何度も繰り返しながら亀裂を補修しました。



↑小舞に縄を結び、土が定着しやすいようにしている

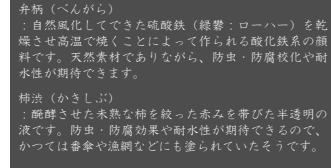


↑壁がひび割れないよう何度も土を塗り重ねていく



塗装

経年変化で色あせていた弁柄塗りの外壁や天井などに、再度弁柄を塗り、もとの鮮やかで深みを帯びた赤色に仕上げ直しました。塗装の際には、柿渋（かきしぶ）と弁柄（べんがら）を混ぜて塗っています。



弁柄（べんがら）
：自然風化してできた硫酸鉄（緑錆：ローハ）を乾燥させ高温で焼くことによって作られる酸化鉄系の顔料です。天然素材でありながら、防虫・防腐蝕化や耐水性が期待できます。

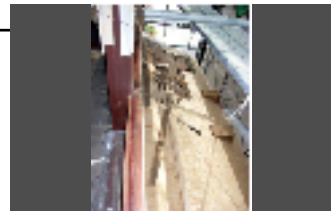
柿渋（かきしぶ）
：醗酵させた未熟な柿を絞った赤みを帯びた半透明の液です。防虫・防腐効果や耐水性が期待できるので、かつては傘や漁網などにも塗られていたそうです。



木羽葺き（こばぶき）屋根

店ノ間下屋に後付けされていた屋根材の下には、木羽葺き（こばぶき）の屋根が現れました。

こけら葺きとも言いますが、サワラなどの耐水性の高い木材を薄く手割りした板を一寸（約3cm）ほどの間隔で重ねて釘で止めていくものです。この建物では、アテを使っています。



↑木羽葺き作業

藁(わら)床量

現在の畳床は、木質パルプを板状にしたボードやフォームポリエスチレンなどで作られていますが、昔の畳床は藁（わら）で編まれていました。

この建物では、藁床の畳が何枚か残っていたので、二階座敷や次ノ間で表替えをして再利用しています。踏んだ心地が柔らかく気持ちがいいです。



↑藁床量



↑畳の表替え

建具

現在では、襖などの枠はカシューが塗られているのが一般的ですが、この建物の建具の一部は漆で仕上げられています。漆塗りは強い光沢のあるカシュー塗りとは違って、深い光沢を放ちます。なかなか違いは分かりにくいのですが、確かにその違いは確認することができます。



↑建具枠の漆塗り



↑既存建具の和紙はがし

石

通り庭や、たて町通り沿いの縁石は、もとあった石を丁寧に取り外し、再度敷き直しています。破損していた箇所や柱があったと思われる箇所の番石（くつし）などには、もとあった石と同じ柔らかな凝灰岩系の石を使っています。



↑通り庭 敷き石の再設置



↑店ノ間前 縁石の再設置